

私の個人主義

夏目漱石

青空文庫

——大正三年十一月二十五日学習院輔仁会において述——

私は今日初めてこの学習院というものの中に這はい入りました。もつとも以前から学習院は多分この見当だろうぐらいに考えていたには相違そういありませんが、はつきりとは存じませんでした。中へ這入ったのは無論今日が初めてでございます。

さきほど岡田さんが紹しょうかい介かたがたちよつとお話になった通りこの春何か講演をというご注文でありましたが、その当時は何か差さしつかえ支かえがあつて、——岡田さんの方が当人の私よりよくご記き

憶おくと見えてあなたがたにご納得のできるようにただいまご説明がありました。とにかくひとまずお断りを致いたさなければならん事になりました。しかしただお断りを致すのもあまり失礼と存じまして、この次には参りますからという条件をつけ加えておきました。その時念のためこの次はいつごろになりますかと岡田さんに伺うかがいましたら、此年ことしの十月だというお返事であつたので、心のうちに春から十月までの日数を大体繰くつてみて、それだけの時間があればそのうちにどうにかできるだろうと思つたものですから、よろしゅうございますとはつきりお受うけあ合申したのであります。ところが幸か不幸か病氣かかに罹かりまして、九月いっぱい床とこについておりますうちにお約やくそく束の十月が参りました。十月にはもう臥ふせ

つてはおりませんでしたけれども、何しろひよろひよろするので講演はちよつとむずかしかつたのです。しかしお約束を忘れてはならないのですから、腹の中では、今に何か云いつて来られるだろう来られるだろうと思つて、内ない々ないは怖こわがつていました。

そのうちひよろひよろもついに癒なおつてしまつたけれども、こちらからは十月末まで何のご沙汰さたもなく打ち過ぎました。私は無論病気の事をご通知はしておきませんでした、二三の新聞にちよつと出たという話ですから、あるいはその辺の事情を察せられて、誰だれかが私の代りに講演をやつて下さつたのだろうと推測して安心して出しました。ところがまた岡田さんがまた突とつ然ぜん見えたのであります。岡田さんはわざわざ長靴を穿はいて見えたのであります。

(もつとも雨の降る日であつたからでもありませんが、) そう云つた身みごしら拵しらえで、早稲田わせだの奥おくまで来て下すつて、例の講演は十一月の末まで繰り延ばす事にしたから約束通りやつてもらいたいというご口上なのです。私はもう責任を逃のがれたように考えていたものですから実は少々驚おどろきました。しかしまだ一カ月も余裕よゆうがあるから、その間にどうかなるだろうと思つて、よろしゅうございますとまたご返事を致しました。

右の次第で、この春から十月に至るまで、十月末からまた十一月二十五日に至るまでの間に、何か纏まとつたお話まをすべき時間はいくらでも拵しらえられるのですが、どうも少し気分が悪くつて、そんな事を考えるのが面めん倒とうでたまらなくなりました。そこでまあ十

一月二十五日が来るまでは構うまいという横着な料簡りようけんを起しおこて、ずるずるべつたりにその日その日を送っていたのです。いよいよと時日が逼せまつた二三日前になって、何か考えなければならぬという気が少ししたのですが、やはり考えるのが不愉快ふゆかいなのでとうとう絵を描かいて暮くらしてしまいました。絵を描くというとかえらいものが描けるように聞きえるかも知れませんが、実は他愛もないものを描いて、それを壁かべに貼はりつけて一人で二日も三日もぼんやり眺ながめているだけなのです。昨日でしたかある人が来て、この絵は大変面白い——いや面白いと云ったではありません、面白い気分の時に描いた画えらしく見えると云ってくれたのでした。それから私は愉快だから描いたのではない、不愉快だから描いた

のだと云つて私の心の状態をその男に説明してやりました。世の中には愉快でじつとしていられない結果を画にしたり、書にしたり、または文にしたりする人がある通り、不愉快だから、どうかして好い心こころもち持もちになりたいと思つて、筆を執とつて画なり文章なりを作る人もあります。そうして不思議にもこの二つの心的状態が結果に現われたところを見るとよく一致いっちしている場合が起るのです。しかしこれはほんのついでに申し上あげる事で、話の筋に関係した問題でもありませんから深くは立ち入りません。——何しろ私はその変な画を眺めるだけで、講演の内容をちつとも組み立てずに暮らしてしまつたのです。

そのうちいよいよ二十五日が来たので、否いやでも応おでもここへ顔

を出さなければすまない事になりました。それで今朝けさ少し考かんがを纏まとめてみました。準備がどうも不足のようです。とてもご満足の行くようなお話はできかねますから、そのつもりでご辛しん防ぼうを願ねがいます。

この会はいつごろから始まって今日まで続いているのか存じませんが、そのつどあなたがよその人を連れて来て、講演をさせるのは、一般の慣例として毫ごうも不都合でないと私も認めているのですが、また一方から見ると、それほどあなた方の希望するような面白い講演は、いくらどこからどんな人を引張ひっぱつて来てても容易よに聞かれるものではなかつても思おもうのです。あなたがたにはただよその人が珍めづらしく見えるのではありますまいか。

私が落語家から聞いた話の中にこんな諷刺的のがあります。

——昔むかしあるお大名が二人目黒辺へ鷹狩たかがりに行つて、所々方々を

馳かけ廻まわつた末、大變空腹になつたが、あいにく弁当の用意もなし、

家来とも離れ離れになつて口腹を充みたす糧かてを受ける事ができず、

仕方なしに二人はそこにある汚きたない百姓家へ馳ひやくしやうやけ込んで、何

でも好いから食わせると云つたそうです。するとその農家の爺じいさ

んと婆ばあさんが気の毒がつて、ありあわせの秋刀魚さんまを炙あぶつて二人の

大名に麦飯を勧めたと云います。二人はその秋刀魚を肴さかなに非常に

旨うまく飯を済まして、そこを立たち出たが、翌日になつても昨日の秋

刀魚の香かおりがぶんぶん鼻を衝つくといつた始末で、どうしてもその味

を忘れる事ができないのです。それで二人のうちの一人が他を招

待して、秋刀魚のご馳走ちそうをする事になりました。その旨むねを承うけたまわつて驚ろいたのは家来です。しかし主命ほんこうですから反抗はんこうする訳にも行きませんので、料理人に命じて秋刀魚の細い骨を毛抜けぬきで一本一本抜ぬかして、それを味淋みりんか何かに漬つけたのを、ほどよく焼いて、主人と客とに勧めました。ところが食う方は腹も減へつていず、また馬鹿ばか丁寧ていねいな料理方で秋刀魚の味を失なつた妙みょうな肴はしを箸はしで突つついでみたところで、ちつとも旨うまいくないのです。そこで二人が顔を見合せて、どうも秋刀魚は目黒に限るねといったような変な言葉を発はしたと云うのが話わの落おちになつて居るのですが、私から見ると、この学習院という立派な学校で、立派な先生に始終接あっている諸君が、わざわざ私のようなものの講演を、春から秋の末まで待ま

てもお聞きになろうというのは、ちょうど大牢の美味に飽いた結果、目黒の秋刀魚がちよつと味わってみたくなつたのではないかと思われるのです。

この席におられる大森教授は私と同年かまたは前後して大学を出られた方ですが、その大森さんが、かつて私にどうも近頃ちかごろの生徒は自分の講義をよく聴きかないで困る、どうも真面目まじめが足りないで不都合ふつごうだというような事を云われた事があります。その評はこの学校の生徒についてではなく、どこかの私立学校の生徒についてだったろうと記憶していますが、何しろ私はその時大森さんに対して失礼な事を云いました。

ここで繰り返していうのもお恥はずかしい訳ですが、私はその時、

君などの講義をありがたがって聴く生徒がどこの国にいるものかと申したので。もつとも私の主意はその時の大森君には通じていなかったかも知れませんか、この機会を利用して、誤解を防いでおきますが、私どもの書生時代、あなたがたと同年輩どうねんぱい、もしくはもう少し大きくなつた時代、には、今のあなたがたよりよほど横着で、先生の講義などはほとんど聴いた事がないと云つても好いくらいのものでした。もちろんこれは私や私の周囲のものを本位として述べるのでありますから、けんがい圏外にいたものには通用しないかも知れませんが、どうも今の私からふり返つてみると、そんな気がどこかでするように思われるのです。現にこの私は上部うわべだけは温順らしく見えながら、けっして講義などに耳

をかたむける性質ではありませんでした。始終怠けてのらくらしていません。その記憶をもつて、真面目な今の生徒を見ると、どうしても大森君のように、彼らを攻撃する勇気が出て来ないので。そう云つた意味からして、つい大森さんに対してすまない乱暴を申したのであります。今日は大森君に詫まるためにわざわざ出かけた次第ではありませんけれども、ついでだからみんなのいる前で、謝罪しておくのです。

話がついとんだところへ外れてしまいましたから、再び元へ引き返して筋の立つように云いますと、つまりこうなるのです。

あなたがたは立派な学校に入つて、立派な先生から始終指導を受けていらつしやる、またその方々の専門的もしくは一般的な

講義を毎日聞いていらつしやる。それだのに私みたようなものを、ことさらによそから連れて来て、講演を聴こうとなされるのは、ちようど先刻お話したお大名が目黒の秋刀魚を賞しょうが翫がんしたようなもので、つまりは珍らしいから、一口食ってみようという料簡じやないかと推察されるのです。實際をいうと、私のようなものよりも、あなたがたが毎日顔を見ていらつしやる常じょう雇やといの先生のお話の方がよほど有益でもあり、かつまた面白かろうとも思われるのです。たとい私にしたところで、もしこの学校の教授にでもなっていたならば、単に新らしい刺戟しげきのないというだけでも、このくらい的人数が集つて私の講演をお聴ききになる熱心ねっしんなり好こう奇き心しんなりは起るまいと考えるのですがどんなものでしょう。

私がなぜそんな仮定をするかというところ、この私は現に昔しこの学習院の教師になろうとした事があるのです。もつとも自分で運動した訳でもないのですが、この学校にいた知人が私を推薦してくれたのです。その時分の私は卒業する間際まで何をして衣食の道を講じていいか知らなかつたほどの迂濶者でしたが、さていよいよ世間へ出てみると、懐ふところ手でをして待つていたつて、下宿料が入つて来る訳でもないので、教育者になれるかなれないかの問題はとにかく、どこかへ潜もぐり込こむ必要があつたので、ついでこの知人のいう通りこの学校へ向けて運動を開始した次第であります。その時分私の敵が一人ありました。しかし私の知人は私に向つてしきりに大丈夫だいじょうぶらしい事をいうので、私の方でも、もう任

命されたような気分になって、先生はどんな着物を着なければならぬのかなどと訊きいてみたものです。するとその男はモーニングでなくては教場へ出られないと云いますから、私はまだ事のきまらない先に、モーニングを誂あつらえてしまったのです。そのくせ学習院とはどこにある学校かよく知らなかったのだから、すこぶる変なものです。さていよいよモーニングが出来上できあがつてみると、あに計らんやせつかく頼たのみにしていた学習院の方は落第と事がきまったのです。そうしてもう一人の男が英語教師の空位を充たす事になりました。その人は何という名でしたか今は忘れてしまいました。別段悔くやしくも何ともなかったからでしょう。何でも米国帰りの人とか聞いていました。——それで、もしその時にその米

国帰りの人が採用されずに、この私がまぐれ当りに学習院の教師になつて、しかも今日まで永続していたなら、こうした鄭重ていちようなお招きを受けて、高い所からあなたがたにお話をする機会もついに来なかつたかも知れますまい。それをこの春から十一月までも待つて聴いて下さろうというのは、とりも直さず、私が学習院の教師に落第して、あなたがたから目黒の秋刀魚のように珍らしがられている証しょうこ拠こではありませんか。

私はこれから学習院を落第してから以後の私について少々もうし上げあようと思います。これは今までお話をして来た順序だからという意味よりも、今日の講演に必要な部分だからと思つて聴いていただきたいのです。

私は学習院は落第したが、モーニングだけは着ていました。それよりほかに着るべき洋服は持っていなかったのだから仕方がありません。そのモーニングを着てどこへ行つたと思えますか？

その時分は今と違つて就職の途は大変楽でした。どちらを向いても相当の口は開いていたように思われるのです。つまりは人が払底なためだつたのでしよう。私のようなものでも高等学校と、

高等師範しはんからほとんど同時に口がかかりました。私は高等学校へしゅうせん周旋しゅうせんしてくれた先輩に半分承しょうだく諾だくを与えながら、高等師範

の方へも好いい加減な挨拶あいさつをしてしまったので、事が変な具合にもつれてしまいました。もともと私が若いから手ぬかりやら、不ふ行届ゆきとどきがちで、とうとう自分に崇たたつて来たと思えば仕方がありま

せんが、弱らせられた事は事実です。私は私の先輩なる高等学校の古参の教授の所へ呼びつけられて、こつちへ来るような事を云いながら、他ほかにも相談をされては、仲に立った私が困ると云つてけんせき譴責けんせきされました。私は年の若い上に、馬鹿の肝癩かんしやくもち持もちですから、いつそ双方そうほうとも断つてしまつたら好いだろうと考えて、その手続きをやり始めたのです。するとある日当時の高等学校校長、今ではたしか京都の理科大学長をしている久原さんから、ちよつと学校まで来てくれという通知があつたので、さつそく出かけてみると、その座に高等師範の校長嘉納治五郎かのうじごろうさんと、それに私を周旋しゆせんしてくれた例の先輩がいて、相談はきまつた、こつちに遠えんり慮よは要いらないから高等師範の方へ行つたら好かろうという忠告

です。私は行いがかり上い否やだとは云えませんが承諾の旨を答えました。が腹の中では厄や介っな事になつてしまつたと思わざるを得なかつたのです。というものは今考えともつたない話ですが、私は高等師範などをそれほどありがたく思つていながつたのです。嘉納さんに始めて会つた時も、そうあなたのように教育者として学生の模範もはんになれというような注文だと、私にはとても勤まりかねるからと逡しゆん巡じゆんしたくらいでした。嘉納さんは上手な人ですから、否そう正直に断ことわられると、私はますますあなたに来ていただきたくなつたと云つて、私を離はなさなかつたのです。こういう訳で、未熟な私は双方の学校を懸かけ持もちしようなどという慾よく張はり根性じやうは更さらになかつたにかかわらず、関係者に要らざる手数をか

けた後、とうとう高等師範の方へ行く事になりました。

しかし教育者として偉えらくなり得るような資格は私に最初から欠けていたのですから、私はどうも窮きゆうくつ屈おそで恐れ入りました。嘉納さんもあなたはあまり正直過ぎて困ると云ったくらいですから、あるいはもつと横着をきめていてもよかつたのかも知れません。しかしどうあつても私には不向ふむきな所だとしか思われませんでした。奥底のない打ち明けたお話をすると、当時の私はまあ肴屋が菓かし子や家へ手伝いに行つたようなものでした。

一年の後私はとうとう田舎いなかの中学へ赴任ふにんしました。それは伊予いよの松山にある中学校です。あなたがたは松山の中学と聞いてお笑いになるが、おおかた私の書いた「坊ちゃん」でもご覧になつた

のでしよう。「坊ちゃん」の中に赤シャツという渾名あだなをもっている人があるが、あれはいったい誰の事だと私はその時分よく訊かれたものです。誰の事だつて、当時その中学に文学士と云つたら私一人なのですから、もし「坊ちゃん」の中の人物を一々実在のものとするならば、赤シャツはすなわちこういう私の事にならなければならぬので、——はなはだありがたい仕合せと申上げたというような訳になります。

松山にもたった一カ年しかおりませんでした。立つ時に知事が留めてくれましたが、もう先方と内約ができていたので、とうとう断つてそこを立ちました。そうして今度は熊くまもと本の高等学校に腰こしを据すえました。こういう順序で中学から高等学校、高等学校か

ら大学と順々に私は教えて来た経験をもっていますが、ただ小学校と女学校だけはまだ足を入れたためし試がございません。

熊本には大分長くおりました。突然文部省から英国へ留学をしてはどうかという内談のあつたのは、熊本へ行つてから何年目になりました。私はその時留学をこと断わろうかと思ひました。それは私のようなものが、何の目的ももたずに、外国へ行つたからと云つて、別に国家のために役に立つ訳もなからうと考えたからです。しかるに文部省の内意を取次とりついでくれた教頭が、それは先方の見込みなのだから、君の方で自分を評価する必要はない、ともかくも行つた方が好かろうと云うので、私も絶対に反抗する理由もないから、命令通り英国へ行きました。しかし果はたせるかな何

もする事がないのです。

それを説明するためには、それまでの私というものを一応お話ししなければならん事になります。そのお話がすなわち今日の講演の一部分を構成する訳なのですからそのつもりでお聞きを願います。

私は大学で英文学という専門をやりました。その英文学というものはどんなものかとお尋ねたずになるかも知れませんが、それを三年専攻した私にも何が何だかまあ夢中むちゆうだったので。その頃はジクソンという人が教師でした。私はその先生の前で詩を読ませられたり文章を読ませられたり、作文を作つて、冠詞かんしが落ちていると云つて叱しかられたり、発音が間違つていると怒おこられたりしまし

た。試験にはウオーズウオーズは何年に生れて何年に死んだとか、シエクスピヤのフォリオは幾通りあるかとか、あるいはスコットの書いた作物を年代順に並べ^{なら}てみるとかいう問題ばかり出たのです。年の若いあなた方にもほぼ想像ができるでしょう、はたしてこれが英文学かどうかという事が。英文学はしばらく措^おいて第一文学とはどういうものだか、これではどうてい解^{わか}るはずがありません。それなら自力でそれを窮^{きわ}め得るかと云うと、まあ盲目^{めくら}の垣^{かき}覗^{のぞ}きといったようなもので、図書館に入つて、どこをどううろついても手^て掛^{がかり}がないのです。これは自力の足りないばかりでなくその道に關した書物も乏^{とほ}しかったのだらうと思ひます。とにかく三年勉強して、ついに文学は解らずじまいだったので。私

の煩悶はんもんは第一ここに根ざしていたと申し上げても差支ないでしょう。

私はそんなあやふやな態度で世の中へ出てとうとう教師になつたというより教師にされてしまったのです。幸に語学の方は怪あやしいにせよ、どうかこうかお茶を濁にごして行かれるから、その日その日はまあ無事に済んでいましたが、腹の中は常に空くう虚きよでした。空虚ならいつそ思い切りがよかつたかも知れませんが、何だか不愉快な煮にえ切きらない漠ぼく然ぜんたるものが、至る所に潜ひそんでいるように堪たまらないのです。しかも一方では自分の職業としている教師というものに少しの興味ももち得ないのです。教育者であるという素因の私に欠乏している事は始めから知っていました。ただ

教場で英語を教える事がすでに面倒なのだから仕方ありません。私は始終中腰で隙があつたら、自分の本領へ飛び移ろう飛び移ろうとのみ思っていたのですが、さてその本領というのがあるように、無いようで、どこを向いても、思い切つてやつと飛び移れないのです。

私はこの世に生れた以上何かしなければならん、といつて何をして好いか少しも見当がつかない。私はちようど霧の中に閉じ込められた孤独の人間のように立ち竦んでしまったのです。そうしてどこからか一筋の日光が射して来ないかしらんという希望よりも、こちらから探照灯を用いてたった一条で好いから先まで明らかに見たいという気がしました。ところが不幸にしてどちらの

方角を眺めてもぼんやりしているのです。ぼうつとしてい
す。あたかも囊ふくろの中に詰つめられて出る事のできない人のような気
持がするのです。私は私の手にただ一本の錐きりさえあればどこか一
カ所突き破つて見せるのだがと、焦燥あせり抜ぬいたのですが、あいに
くその錐は人から与えられる事もなく、また自分で発見する訳に
も行かず、ただ腹の底ではこの先自分はどうなるだろうと思つて、
人知れず陰鬱いんうつな日を送つたのであります。

私はこうした不安を抱いだいて大学を卒業し、同じ不安を連れて松
山から熊本へ引越ひっこし、また同様の不安を胸の底に置たんでついには外
国まで渡わたつたのであります。しかしいつたん外国へ留学する以上
は多少の責任を新たに自覚させられるにはきまつています。それ

ではできるだけ骨を折って何かしようと努力しました。しかしどんな本を読んでも依然^{いぜん}として自分は囊の中から出る訳に参りません。この囊を突き破る雖は倫敦^{ロンドン}中探して歩いても見つかりそうになかったのです。私は下宿の一間の中で考えました。つまりないと思いました。いくら書物を読んでも腹の足^{たし}にはならないのだと諦^{あきら}めました。同時に何のために書物を読むのか自分でもその意味が解らなくなつて来ました。

この時私は始めて文学とはどんなものであるか、その概^{がい}念^{ねん}を根本的に自力で作上げるよりほかに、私を救う途はないのだと悟^{さと}つたのです。今までは全く他人本位で、根のない萍^{うきぐさ}のように、そこいらをでたらめに漂^{ただ}よつていたから、駄^だ目^めであつたという事

によろやく気がついたのです。私のここに他人本位というのは、自分の酒を人に飲んでもらって、後からその品評を聴いて、それを理が非でもそうだとしてしまういわゆる人真似ひとまねを指すのです。一口にこう云ってしまえば、馬鹿らしく聞こえるから、誰もそんな人真似をする訳がないと不審ふしんがられるかも知れませんが、事實はけっしてそうではないのです。近頃流行はやるベルグソンでもオイケンでもみんな向うむこの人がとやかきうので日本人もその尻馬しりうまに乗って騒さわぐのです。ましてその頃は西洋人のいう事だと云えば何でもかでも盲もうじゆう従したがって威張いばったものです。だからむやみに片仮名を並べて人に吹ふい聴ちようして得意がった男が比々みなこれ皆是なりと云いたいくらいごろごろしていました。他ひとの悪口ではありません。

こういう私が現にそれだったのです。たとえばある西洋人が甲こうと
いう同じ西洋人の作物を評したのを読んだとすると、その評の当
否はまるで考えずに、自分の腑ふに落ちようが落ちまいが、むやみ
にその評を触ふれ散らかすのです。つまり鶉うのみ吞と云つてもよし、ま
た機械的の知識と云つてもよし、とうていわが所有とも血とも肉
とも云われぬ、よそよそしいものを我物わがものがお顔にしやべつて歩く
のです。しかるに時代が時代だから、またみんながそれを賞ほめる
のです。

けれどもいくら人に賞められたつて、元々人の借着くじやくをして威張
っているのだから、内心は不安です。手もなく孔雀くじやくの羽根を身
に着けて威張かっているようなものですから。それでももう少し浮華ふか

を去つて摯^{しじつ}実につかなければ、自分の腹の中はいつまで経^たつたつて安心はできないという事に気がつき出したのです。

たとえば西洋人がこれは立派な詩だとか、口調が大変好いとか云つても、それはその西洋人の見るところで、私の参考にならん事はないにしても、私にそう思えなければ、とうてい受^{うけうり}売をすべきはずのものではないのです。私が独立した一個の日本人であつて、けつして英国人の奴婢^{どひ}でない以上はこれくらいの見識は国民の一員として具^{そな}えていなければならぬ上に、世界に共通な正直という徳義を重んずる点から見ても、私は私の意見を曲げてはならないのです。

しかし私は英文学を専攻する。その本場の批評家のいうところ

と私の考かんがえと矛盾むじゆんしてはどうも普通ふつうの場合ばあひ気が引ける事になる。

そこでこうした矛盾がはたしてどこから出るかという事を考えなければならなくなる。風俗、人情、習慣さかのぼ、溯さかのぼつては国民の性格皆

この矛盾の原因になつてゐるに相違ない。それを、普通の学者は単に文学と科学とを混同して、甲の国民に気に入るものはきつと

乙おつの国民の賞讃を得るにきまつてゐる、そうした必然性ふくが含まれてゐると誤認してかかる。そこが間違つてゐると云わなければなら

ない。たといこの矛盾を融和ゆうわする事が不可能にしても、それを

説明する事はできるはずだ。そうして単にその説明だけでも日本の文壇ぶんだんには一道の光明を投げ与あたえる事ができる。——こう私は

その時始めて悟つたのでした。はなはだ遅おそまきの話で慚愧ざんきの至いたりで

ありますけれども、事実だから偽らないところを申し上げるのです。

私はそれから文芸に対する自己の立脚地を堅めるため、堅めるといふより新らしく建設するために、文芸とは全く縁のない書物を読み始めました。一口でいうと、自己本位という四字をようやく考えて、その自己本位を立証するために、科学的な研究やらてつがくてき哲學的の思索に耽り出したのであります。今は時勢が違いますから、この辺の事は多少頭のある人にはよく解せられています。ですが、その頃は私が幼稚な上に、世間がまだそれほど進んでいなかったのです、私のやり方は実際やむをえなかったのです。

私はこの自己本位という言葉を自分の手に握ってから大変強く

なりました。彼ら何者ぞやと感慨が出ました。今まで茫然と自
失していた私に、ここに立つて、この道からこう行かなければな
らないと指図さしずをしてくれたものは実にこの自我本位の四字なので
あります。

自白すれば私はその四字から新たに出立したのであります。そ
うして今のようにただ人の尻馬にばかり乗って空騒ぎをしている
ようではなはだ心元ない事だから、そう西洋人ぶらないでも好
いという動かすべからざる理由を立派に彼らの前に投げ出して
みたら、自分もさぞ愉快だろう、人もさぞ喜ぶだろうと思つて、著
書その他の手段によつて、それを成就するのを私の生涯しょうがいの事
業としようと考えたのです。

その時私の不安は全く消えました。私は軽快な心をもつて陰鬱な倫敦を眺めたのです。比喻で申すと、私は多年の間懊惱した結果ようやく自分の鶴嘴をがちりと鉋脈に掘り当てたような気がしたのです。なお繰り返していうと、今まで霧の中に閉じ込まれたものが、ある角度の方向で、明らかに自分の進んで行くべき道を教えられた事になるのです。

かく私が啓発された時は、もう留学してから、一年以上経過していたのです。それでとても外国では私の事業を仕上げる訳に行かない、とにかくできるだけ材料を纏めて、本国へ立ち帰った後、立派に始末をつけようという気になりました。すなわち外国へ行った時よりも帰って来た時の方が、偶然ながらある力を得た事

になるのです。

ところが帰るや否や私は衣食のために奔走ほんそうする義務がさつそく起りました。私は高等学校へも出ました。大学へも出ました。後では金が足りないので、私立学校も一軒稼けかせぎました。その上私は神経衰弱しんけいすいじやくに罹かかりました。最後に下らない創作などを雑誌に載のせなければならぬ仕儀しぎに陥おちいりました。いろいろの事情で、私は私の企くわだてた事業を半途ほんとで中止してしまいました。私の著あわした文学論はその記念というよりもむしろ失敗の亡骸なきがらです。しかも畸形児きけいじの亡骸なきがらです。あるいは立派に建設されないうちに地震じしんで倒たおされた未成市街の廃墟はいきよのようなものです。

しかしながら自己本位というその時得た私の考は依然としてつ

づいています。否年を経るに従ってだんだん強くなります。著作的事業としては、失敗に終りましたけれども、その時確かに握った自己が主で、他は賓ひんであるという信念は、今日の私に非常の自信と安心を与えてくれました。私はその引続きとして、今日なお生きていられるような心持がします。実はこうした高い壇の上に立って、諸君を相手に講演をするのもやはりその力のお蔭かげかも知れません。

以上はただ私の経験だけをざっとお話ししたのでありますけれども、そのお話しを致した意味は全くあなたがたのご参考になりはしまいかという老婆心ろうばしんからなのであります。あなたがたはこれからみんな学校を去って、世の中へお出かけになる。それには

まだ大分時間のかかる方もございましょうし、またはおっつけ実
社界に活動なさる方もあるでしょうが、いずれも私の一度経過し
た煩悶はんもん（たとい種類は違って）を繰返くりかえしがちなものじやな
かろうかと推察されるのです。私のようにどこか突き抜けたくつ
ても突き抜ける訳にも行かず、何か掴つかみたくつても薬缶頭やかんあたまを掴
むようにつるつるして焦燥しじれつたくなったりする人が多分あるだ
ろうと思うのです。もしあなたがたのうちですでに自力で切り開
いた道を持っている方は例外であり、また他ひとの後に従つて、それ
で満足して、在来ざいらいの古い道を進んで行く人も悪いとはけつして申
しません、（自己に安心と自信がしっかり附随ふぞいしているならば
、）しかしもしそうでないとしたならば、どうしても、一つ自分

の鶴嘴で掘り当てるところまで進んで行かなくってはいけないでしょう。いけないというのは、もし掘りあてる事ができなかつたなら、その人は生涯不愉快で、始終中腰になつて世の中にまごまごしていなければなりません。私のこの点を力説するのは全くそのために、何も私を模範もはんになさいという意味ではけつしてないのです。私のようなつまらないものでも、自分で自分が道をつけつつ進み得たという自覚があれば、あなた方から見てその道がいかに下らないにせよ、それはあなたがたの批評と観察で、私には寸毫すんごうの損害がないのです。私自身はそれで満足するつもりであります。しかし私自身がそれがため、自信と安心をもつてゐるからといって、同じ径路けいろがあなたがたの模範になるとはけつし

て思つてはいないので、誤解してはいけません。

それはとにかく、私の経験したような煩悶があなたがたの場合にもしばしば起るに違いないと私は鑑定かんていしているのですが、どうでしょうか。もしそうだとすると、何かに打ち当るまで行くという事は、学問をする人、教育を受ける人が、生涯の仕事としても、あるいは十年二十年の仕事としても、必要じゃないでしょうか。ああここにおれの進むべき道があつた！ ようやく掘り当てた！ こういう感投詞を心の底から叫さけび出される時、あなたがたは始めて心を安んずる事ができるのでしよう。容易に打ち壊こわされない自信が、その叫なび声とともにむくむく首を擡もたげて来るのではありませんか。すでにその域に達している方も多数のうちにはあ

るかも知れませんが、もし途中で霧か靄もやのために懊惱わうぼうしていられる方があるならば、どんな犠牲ぎせいを払はらつても、ああここだという掘ほ当りあてるところまで行ったらよろしかろうと思うのです。必ずしも国家のためばかりだからというのではありません。またあなた方のご家族のために申し上げる次第でもありません。あなたが自身みづかみの幸福のために、それが絶対に必要じゃないかと思うから申上げるのです。もし私の通ったような道を通り過ぎた後なら致し方ふみつぶもないが、もしどこかにこだわりがあるなら、それを踏潰ふみつぶすまで進まなければ駄目ですよ。——もつとも進んだってどう進んで好いか解らないのだから、何かにぶつかる所まで行くよりほかに仕方がないのです。私は忠告がましい事をあなたがたに強いる気

はまるでありませんが、それが将来あなたがたの幸福の一つになるかも知れないと思うと黙だまつていらなくなるのです。腹の中の煮え切らない、徹底てつていしない、ああでもありこうでもあるというような海鼠なまこのような精神を抱いだいてぼんやりしては、自分が不愉快ではないか知らんと思うからいのです。不愉快でないとおっしゃればそれまでです、またそんな不愉快は通り越こしているとおっしゃれば、それも結構であります。願ねがくは通り越こしてありたいと私は祈いのるのであります。しかしこの私は学校を出て三十以上まで通り越せなかつたのです。その苦痛は無論鈍痛どんつうではありましたが、年々歳さいさい々感かんずる痛いたみには相違なかつたのであります。だからもし私のような病気に罹かつた人が、もしこの中にあるならば、

どうぞ勇猛ゆうもうにお進みにならん事を希望してやまないのです。もしそこまで行ければ、ここにおれの尻を落ちつける場所があったのだという事実をご発見になって、生涯の安心と自信を握る事ができるようになると思うから申し上げるのです。

今まで申し上げた事はこの講演の第一篇ぺんに相当するものですが、私はこれからその第二篇に移ろうかと考えます。学習院という学校は社会的地位の好い人が這入る学校のように世間から見倣みなされております。そうしてそれがおそらく事実なのでしよう。もし私の推察通り大した貧民はここへ来ないで、むしろ上流社会の子弟ばかりが集まっているとすれば、向後あなたがたに附随してくるものうちで第一番に挙げなければならぬのは権力であります。

換^{かんげん}言すると、あなた方が世間へ出れば、貧民が世の中に立つた時よりも余計権力が使えるという事なのです。前申した、仕事をして何かに掘りあてるまで進んで行くという事は、つまりあなた方の幸福のため安心のためには相違ありませんが、なぜそれが幸福と安心とをもたらすかという点、あなた方のもって生れた個性がそこにぶつかって始めて腰がすわるからでしょう。そうしてそこに尻を落ちつけてだんだん前の方へ進んで行くとその個性がますます発展して行くからでしょう。ああここにおれの安住の地位があったと、あなた方の仕事とあなたがたの個性が、しっくり合った時に、始めて云い得るのでしょう。

これと同じような意味で、今申し上げた権力というものを吟味^{ぎんみ}

してみると、権力とは先刻さつぎお話しした自分の個性を他人の頭の上に無理矢理にお押しつける道具なのです。道具だと断然云い切つてわるければ、そんな道具に使い得る利器なのです。

権力に次ぐものは金力です。これもあなたがたは貧民よりも余計に所有しておられるに相違ない。この金力を同じくそうした意味から眺めると、これは個性を拡張するために、他人の上に誘ゆうわ惑くの道具として使用し得る至極重宝なものになるのです。

してみると権力と金力とは自分の個性を貧乏人びんぼうにんより余計に、他人の上に押し被かぶせるとか、または他人をその方面に誘おびき寄せるとかいう点において、大変便宜べんぎな道具だと云わなければなりません。こういう力があるから、偉いようであり、その実非常に危険

なのです。先刻申した個性はおもに学問とか文芸とか趣味しゆみとかに
 ついて自己の落ちつくべき所まで行つて始めて発展するようにお
 話し致したのですが、実をいうとその応用はなはだ広いもので、
 単に学芸だけにはとどまらないのです。私の知っている兄弟で、
 弟の方は家に引込んでひっこ書物などを読む事が好きなのに引き易ひかえて、
 兄はまた釣道楽つりどうらくに憂身うきみをやつしているのがあります。するとこ
 の兄が自分の弟の引込思案でただ家にばかり引籠ひきこもつているのを
 非常に忌いまわしいもののように考えるのです。必ひつきょう 竟は釣をし
 ないからああいう風に厭世えんせい的になるのだと合点がてんして、むやみに
 弟を釣に引張り出そうとするのです。弟はまたそれが不愉快でた
 まらないのだけれども、兄が高圧的に釣竿つりざおを担かがしたり、魚籃びく

を提げさせたりして、釣堀へ随行を命ずるものだから、まあ目を
瞋つむつてくつついて行って、気味の悪い鮒ふななどを釣つていやいや帰
つてくるのです。それがために兄の計画通り弟の性質が直つたか
というと、けっしてそうではない、ますますこの釣というものに
対して反抗心を起してくるようになります。つまり釣と兄の性質
とはぴたりと合つてその間に何の隙間もないのでしようが、それ
はいわゆる兄の個性で、弟とはまるで交こうしやう渉がないのです。こ
れはもとより金力の例ではありません、権力の他を威圧する説明
になるのです。兄の個性が弟を圧あつぱく迫して無理に魚を釣らせるの
ですから。もつともある場合には、——例えば授業を受ける時と
か、兵隊になった時とか、また寄宿舎でも軍隊生活を主位におく

とか——すべてそう云つた場合には多少この高圧的手段は免かれ
ますまい。しかし私はおもにあなたがたが一本立いっぽんだちになつて世間
へ出た時の事を云つているのだからそのつもりで聴いて下さらな
くては困ります。

そこで前申した通り自分が好いと思つた事、好きな事、自分と
性の合う事、幸にそこにぶつかつて自分の個性を發展させて行く
うちには、自他の區別を忘れて、どうかあいつもおれの仲間に引ひ
き摺ずり込んでやろうという氣になる。その時権力があると前云つ
た兄弟のような変な關係が出来上るし、また金力があると、それ
をふりまいて、他ひとを自分のようなものに仕立上げようとする。す
なわち金を誘惑の道具として、その誘惑の力で他を自分に氣に入

るように変化させようとする。どっちにしても非常な危険が起るのです。

それで私は常からこう考えています。第一にあなたがたは自分の個性が発展できるような場所に尻を落ちつけべく、自分とぴたりと合った仕事を発見するまで邁進まいしんしなければ一生の不幸であると。しかし自分がそれだけの個性を尊重し得るように、社会から許されるならば、他人に対してもその個性を認めて、彼らの傾け向いこうを尊重するのが理の当然になって来るでしょう。それが必要でかつ正しい事としか私には見えません。自分は天性右を向いているから、あいつが左を向いているのは怪けしからんというのは不都合じゃないかと思うのです。もっとも複雑な分子の寄って出来

上つた善悪とか邪じゃ正せいとかいう問題になると、少々込み入つた解か
いぼう剖はうの力を借りなければ何とも申されませんが、そうした問題の
 関係して来ない場合もしくは関係しても面めん倒とうでない場合には、
 自分わが他ひとから自由を享きやう有ゆうしている限り、他にも同程度の自由
 を与えて、同等に取り扱あつかわなければならん事と信ずるよりほかに
 仕方がないのです。

近頃自我とか自覚とか唱えていくら自分の勝手な真似をしても
 構かわないという符ふ徴ちやうに使うようですが、その中にははなはだ怪
 しいのがたくさんあります。彼らは自分の自我をあくまで尊重す
 るような事を云いながら、他人の自我に至つては毫も認めていな
 いのです。いやしくも公平の眼を具し正義の観念をもつ以上は、

自分の幸福のために自分の個性を發展して行くと同時に、その自由を他にも与えなければすまん事だと私は信じて疑わないのです。我々は他が自己の幸福のために、己れの個性を勝手に發展するのを、相当の理由なくして妨害ぼうがいしてはならないのであります。私はなぜここに妨害という字を使うかというと、あなたがたは正しく妨害し得る地位に将来立つ人が多いからです。あなたがたのうちには権力を用い得る人があり、また金力を用い得る人がたくさんあるからです。

元来をいうなら、義務の附着しておらない権力というものが世の中にあるはずがないのです。私がこうやって、高い壇の上からあなた方を見下して、一時間なり二時間なり私の云う事をせいし静

肅ゆくに聴いていただく権利を保留する以上、私の方でもあなた方を静肅にさせるだけの説を述べなければすまないはずだと思いません。よし平へいほん凡ぼんな講演をするにしても、私の態度なり様子なりが、あなたがたをして礼を正さしむるだけの立派さをもっていないければならぬはずのものであります。ただ私はお客である、あなたがたは主人である、だからおとなしくしなくてはならない、とこう云おうとすれば云われない事もないでしょうが、それは上うわつら面の礼式にとどまる事で、精神には何の関係もない云わば因いんしゅう襲しゅうと
いったようなものですから、てんで議論にはならないのです。別の例を挙げてみますと、あなたがたは教場で時々先生から叱られる事があるでしょう。しかし叱りつ放しの先生がもし世の中にあ

るとすれば、その先生は無論授業をする資格のない人です。叱る代りには骨を折って教えてくれるにきまっています。叱る権利をもつ先生はすなわち教える義務をももっているはずなのですから。先生は規律をただすため、秩序ちつじよを保つために与えられた権利を十分に使うでしょう。その代りその権利と引き離す事のできない義務もつく尽さなければ、教師の職を勤め終おほせる訳に行きません。

金力についても同じ事があります。私の考かんがえによると、責任を解しない金力家は、世の中にあつてならないものなのです。その訳を一口にお話しするところになります。金銭というものは至極重宝なもので、何へでも自由自在に融ゆう通ずうが利く。たとえば今私がここで、相場をして十万円儲もうけたとすると、その十万円で家屋を立

てる事もできるし、書籍しよせきを買う事もできるし、または花柳社かりゆう界を賑にぎわす事もできるし、つまりどんな形にでも変つて行く事ができます。そのうちでも人間の精神を買う手段に使用できるのだから恐ろしいではありませんか。すなわちそれをふりまいて、人間の徳義心を買ひ占しめる、すなわちその人の魂たましいを墮落だらくさせる道具とするのです。相場もうで儲けた金が徳義的倫理的りんりてきに大きな威力をもつて働らき得るとすれば、どうしても不都合な応用と云わなければならぬかと思われぬ。思われるのですけれども、實際その通りに金が活動する以上は致し方がない。ただ金を所有している人が、相当の徳義心をもつて、それを道義上害のないように使ふいこなすよりほかに、人心の腐敗ふはいを防ぐ道はなくなってしまうの

です。それで私は金力には必ず責任がついて廻らなければならぬといいたくなります。自分は今これだけの富の所有者であるが、それをこういう方面にこう使えば、こういう結果になるし、ああいう社会にああ用いればああいう影響えいきょうがあると呑み込むだけの見識を養成するばかりでなく、その見識に応じて、責任をもつてわが富を所置しなければ、世の中にすまないと云うのです。いな自分自身にもすむまいというのです。

今までの論旨ろんしをかい摘つまんでみると、第一に自己の個性の発展を仕遂しとげようと思うならば、同時に他人の個性も尊重しなければならぬという事。第二に自己の所有している権力を使用しようと思うならば、それに附随している義務というものを心得なければ

ならないという事。第三に自己の金力を示そうと願うなら、それともなに伴う責任を重おもじなければならぬという事。つまりこの三力条に帰着するのであります。

これをほかの言葉で言い直すと、いやしくも倫理的に、ある程度の修養を積んだ人でなければ、個性を發展する価値もなし、権力を使う価値もなし、また金力を使う価値もないという事になるのです。それをもう一遍べん云い換かえると、この三者を自由に享うけ樂しむためには、その三つのものの背後にあるべき人格の支配を受ける必要が起つて来るといふのです。もし人格のないものがむやみに個性を發展しようとする、他ひとを妨害する、権力を用いようとする、濫らん用ように流れる、金力を使おうとすれば、社会の腐敗

をもたらず。ずいぶん危険な現象を呈^{てい}するに至るのです。そうしてこの三つのものは、あなたがたが将来において最も接近しやすいものであるから、あなたがたはどうしても人格のある立派な人間になっておかなくてはいけないだろうと思います。

話が少し横へそれますが、ご存じの通り英吉利^{イギリス}という国は大變自由を尊ぶ国であります。それほど自由を愛する国でありながら、また英吉利ほど秩序の調った国はありません。実をいうと私は英吉利を好かないのです。嫌^{きら}いではあるが事実だから仕方なしに申し上げます。あれほど自由でそうしてあれほど秩序の行き届いた国は恐らく世界中にないでしょう。日本などはとうてい比較^{ひかく}にもなりません。しかし彼らはただ自由なわけではありません。自分の

自由を愛するとともに他の自由を尊敬するように、小供の時分から社会的教育をちゃんと受けているのです。だから彼らの自由の背後にはきつと義務という觀念が伴っています。England expects every man to do his duty といつた有名なネルソンの言葉はけつして当座限りの意味のものではないのです。彼らの自由と表裏して発達して来た深い根柢こんていをもつた思想に違ちがないのです。

彼らは不平があるとよく示威運動をやります。しかし政府はけつして干渉かんしょうがましい事をしません。黙つて放つておくのです。その代り示威運動をやる方でもちやんと心得ていて、むやみに政府の迷惑めいわくになるような乱暴は働かないのです。近頃女権拡張論者と云つたようなものがむやみに狼藉ろうぜきをするように新聞などに

見えています。それはまあ例外です。例外にしては数が多過ぎると云われればそれまでですが、どうも例外と見るよりほかに仕方がないようです。嫁よめに行かれないとか、職業が見つからないとか、または昔から養成された、女を尊敬するという気風につけ込むのか、何しろあれは英国人の平生の態度ではないようです。名画を破る、監獄かんごくで断食だんじきして獄丁ごくていを困らせる、議会のベンチからだへ身体しばを縛りつけておいて、わざわざ騒そうぞう々しく叫び立てる。これは意外の現象ですが、ことによると女は何をしても男の方で遠慮するから構わないという意味でやっているのかも分りません。しかしまあどうい理由にしても変則らしい気がします。一般の英国氣質というものは、今お話しした通り義務の觀念を離れない

程度において自由を愛しているようです。

それで私は何も英国を手本にするという意味ではないのですけれども、要するに義務心を持つていない自由は本当の自由ではないと考えます。と云うものは、そうしたわがままな自由は決して社会に存在し得ないからであります。よし存在してもすぐ他から排^{はいせき}斥^{せき}され踏^ふみ潰^{つぶ}されるにきまつているからです。私はあなたがたが自由にあらん事を切望するものであります。同時にあなたがたが義務というものを納得せられん事を願つてやまないのではありません。こういう意味において、私は個人主義だと公言して憚^{はばか}らないつもりです。

この個人主義という意味に誤解があつてはいけません。ことに

あなたがたのようなお若い人に対して誤解を吹き込んで私がおきませんから、その辺はよくご注意ください。時間が逼っているからなるべく単簡に説明致しますが、個人の自由は先刻お話した個性の發展上極めて必要なものであつて、その個性の發展がまたあなたがたの幸福に非常な關係を及ぼすのだから、どうしても他に影響のない限り、僕は左を向く、君は右を向いても差支ないくらいの自由は、自分でも把持し、他人にも附与しなくてはなるまいかと考えられます。それがとりも直さず私のいう個人主義なのです。金力権力の点においてもその通りで、俺の好きないやつだから畳んでしまえとか、気に喰わない者だからやつつけてしまえとか、悪い事もないのに、ただそれらを濫用したらど

うでしよう。人間の個性はそれで全く破壊はかいされると同時に、人間の不幸もそこから起らなければなりません。たとえば私が何も不都合を働らかないのに、単に政府に気に入らないからと云つて、警視総監けいしそうかんが巡查じゆんさに私の家を取り巻かせたらどんなものでしょう。警視総監にそれだけの権力はあるかも知れないが、徳義はそういう権力の使用を彼に許さないのであります。または三井とか岩崎とかいう豪商ごうしようが、私を嫌うというだけの意味で、私の家の召使めしつかいを買収して事ごとに私に反抗させたなら、これまたどんなものでしょう。もし彼らの金力の背後に人格というものが多少でもあるならば、彼らはけつしてそんな無法を働らく気にはなれないのであります。

こうした弊害^{へいがい}はみな道義上の個人主義を理解し得ないから起るので、自分だけを、権力なり金力なりで、一般に推し広めようとするわがままにほかならぬのであります。だから個人主義、私のここに述べる個人主義というものは、けっして俗人の考えているように国家に危険を及ぼすものでも何でもないので、他の存在を尊敬すると同時に自分の存在を尊敬するというのが私の解釈なのですから、立派な主義だろうと私は考えているのです。

もっと解りやすく云えば、党派心がなくって理非がある主義なのです。朋党^{ほうとう}を結び団隊を作つて、権力や金力のために盲動^{もうどう}しないという事なのです。それだからその裏面には人に知られない淋しさ^{さび}も潜んでいるのです。すでに党派でない以上、我は我の

行くべき道を勝手に行くだけで、そうしてこれと同時に、他人の行くべき道を妨げないのだから、ある時ある場合には人間がばらばらにならなければなりません。そこが淋しいのです。私がかつて朝日新聞の文芸欄ぶんげいらんを担任していた頃、だれであつたか、三宅雪嶺せつれいさんの悪口を書いた事がありました。もちろん人身攻撃ではないので、ただ批評に過ぎないのです。しかもそれがたつた二三行あつたのです。出たのはいつごろでしたか、私は担任者であつたけれども病気をしたからあるいはその病氣中かも知れず、または病氣中でなくって、私が出して好いと認定したのかも知れません。とにかくその批評が朝日の文芸欄に載つたのです。すると「日本及び日本人」の連中が怒りました。私の所へ直接にはか

け合わなかつたけれども、当時私の下働きをしていた男に取消とりけしを申し込んで来ました。それが本人からではないのです。雪嶺さんの子分——子分というと何だか博奕打ばくちうちのようでおかしいが、——まあ同人といったようなものでしょう、どうしても取り消せというのです。それが事実の問題ならもつともですけれども、批評なんだから仕方がないじゃありませんか。私の方ではこちらの自由だというよりほかに途はないのです。しかもそうした取消を申し込んだ「日本及び日本人」の一部では毎号私の悪口を書いている人があるのだからなおのこと人を驚ろかせるのです。私は直接談判はしませんでしたけれども、その話を間接に聞いた時、変な心こころもち持もがしました。というのは、私の方は個人主義でやって

いるのに反して、向うは党派主義で活動しているらしく思われたからです。当時私は私の作物をわるく評したもののさえ、自分の担任している文芸欄へ載せたくらいですから、彼らのいわゆる同人なるものが、一度に雪嶺さんに対する評語が気に入らないと云って怒ったのを、驚ろきもしましたし、また変にも感じました。失礼ながら時代後れだとも思いました。封建ほうけん時代の人間の団隊のようにも考えました。しかしそう考えた私はついに一種の淋しさを脱だつきやく

却する訳に行かなかったのです。私は意見の相違はいかに親しい間柄あいだがらでもどうする事もできないと思っていましたから、私の家に入出入りをする若い人達に助言はしても、その人々の意見の発表に抑よく圧あつを加えるような事は、他に重大な理由のない限り、

けっしてやった事がないのです。私は他の存在（ひと）をそれほど認め
 ている、すなわち他にそれだけの自由を与えているのです。だか
 ら向うの気が進まないのに、いくら私が汚辱を感じるような事が
 あつても、けっして助力は頼めないのです。そこが個人主義の淋
 しきです。個人主義は人を目標として向背（こうはい）を決する前に、まず
 理非を明らかに、去就を定めるのだから、ある場合にはたった一
 人ぼつちになつて、淋しい心持がするのです。それはそのはずで
 す。楨雑木（まきざつぼう）でも束（たば）になつていけば心丈夫（こころじょうぶ）ですから。

それからもう一つ誤解を防ぐために一言しておきたいのですが、
 何だか個人主義というところちよつと国家主義の反対で、それを打ち
 壊すように取られますが、そんな理窟（りくつ）の立たない漫然（まんぜん）としたも

のではないのです。いったい何々主義という事は私のあまり好まないところで、人間がそう一つ主義に片づけられるものではあるまいとは思いますが、説明のためですから、ここにはやむをえず、主義という文字の下にいろいろの事を申し上げます。ある人は今の日本はどうしても国家主義でなければ立ち行かないように云いふらしましたそう考えています。しかも個人主義なるものをじゅうり躪んしなければ国家がほろ亡びるような事を唱道するものも少なくは
ありません。けれどもそんな馬鹿気たはずはけつしてありようがないのです。事実私共は国家主義でもあり、世界主義でもあり、同時にまた個人主義でもあるのであります。

個人の幸福の基礎きそとなるべき個人主義は個人の自由がその内容

になつてゐるには相違ありませんが、各人の享きやう有ゆうするその自由というものは国家の安危に従つて、寒暖計のように上つたり下つたりするのです。これは理論というよりもむしろ事実から出る理論と云つた方が好いかも知れませんが、つまり自然の状態がそうなつて来るのです。国家が危くなれば個人の自由が狭せばめられ、国家が泰たい平へいの時には個人の自由が膨ぼう脹ちやうして来る、それが当然の話です。いやしくも人格のある以上、それを踏み違えて、国家の亡びるか亡びないかという場合に、疴かん違ちがいをしてただむやみに個性の發展ばかりめがけている人はないはずで、私という個人主義のうちには、火事が済んでもまだ火事頭巾ずきんが必要だと云つて、用もないのに窮屈きうくつがる人に対する忠告も含まれてゐると考え

て下さい。また例になります。昔し私が高等学校にいた時分、ある会を創設したものがありません。その名も主意も詳しい事は忘れてしまいました。何しろそれは国家主義を標榜ひょうぼうしたやがましい会でした。もちろん悪い会でも何でもありません。当時の校長の木下広次さんなどは大分肩を入れていた様子でした。その会員はみんな胸にめだるを下げていました。私はめだるだけのご免蒙めんもうむりました。それでも会員にはされたのです。無論発起人でないから、ずいぶん異存もあつたのですが、まあ入つても差支なからうという主意から入会しました。ところがその発会式が広い講堂で行なわれた時に、何かの機はずみでしたらう、一人の会員が壇上に立つて演説めいた事をやりました。ところが会員ではあつた

けれども私の意見には大分反対のところもあつたので、私はその前ずいぶんその会の主意を攻撃していたように記憶しています。しかるにいよいよ発会式となつて、今申した男の演説を聴いてみると、全く私の説の反駁はんぱくに過ぎないのです。故意だか偶然だか解りませんが、私も勢い私はそれに対して答弁の必要が出て来ました。私は仕方なしに、その人のあとから演壇に上りました。當時の私の態度なり行儀なりははなはだ見苦しいものだと思いますが、それでも簡潔に云う事だけは云つて退のけました。ではその時何と云つたかとお尋ねになるかも知れませんが、それはすこぶる簡単なのです。私はこう云いました。——国家は大切かも知れないが、そう朝から晩まで国家国家と云つてあたかも国家に取りつ

かれたような真似はとうてい我々にできる話でない。常住坐じょうじゅうざ

臥が国家の事以外を考えてならないという人はあるかも知れない

が、そう間断なく一つ事を考えている人は事実あり得ない。豆腐とうふ

屋が豆腐を売つてあるくのは、けつして国家のために売つて歩くのではない。根本的の主意は自分の衣食の料を得るためである。

しかし当人はどうあろうともその結果は社会に必要なものを供する
るといふ点において、間接に国家の利益になつてゐるかも知れない。

これと同じ事で、今日の午ひるに私は飯を三杯ばいたべた、晩にはそ

れを四杯に殖ふやしたというのも必ずしも国家のために増減したの

ではない。正直に云えば胃の具合できめたのである。しかしこれ
らも間接のまた間接に云えば天下に影響しないとは限らない、否

観方みかたによつては世界の**大勢**に幾分いくぶんか関係していかないとも限らない。しかしながら**肝心**かんじんの当人はそんな事を考えて、国家のために飯を食わせられたり、国家のために顔を洗わせられたり、また国家のために便所に行かせられたりしては大変である。国家主義を奨励しょうれいするのはいくらしても差支ないが、事実できない事をあたかも国家のためにするごとくに装よそおうのは偽りである。——私の答弁はざつとこんなものでありました。

いったい国家というものが危くなれば誰だつて国家の安否を考えないものは一人もない。国が強く戦争の憂うれいが少なく、そうして他から犯される憂がなければ、国家的観念は少なくなつてしかるべき訳で、その空虚を充たすために個人主義が這入つて

くるのは理の当然と申すよりほかに仕方がないので。今の日本はそれほど安泰でもないでしょう。貧乏である上に、国が小さい。したがっていつどんな事が起つてくるかも知れない。そういう意味から見て吾々は国家の事を考えていなければならぬのです。けれどもその日本が今が今潰れるとか滅亡めつぼうの憂目にあうとかいう国柄でない以上は、そう国家国家と騒ぎ廻る必要はないはず。火事の起らない先に火事装束しょうぞくをつけて窮屈な思いをしながら、町内中駈かけ歩くのと一般であります。必竟ひじやうずるにこういう事は實際程度問題で、いよいよ戦争が起つた時とか、危急存亡の場合とかなれば、考えられる頭の人、——考えなくてはいられない人格の修養の積んだ人は、自然そちらへ向いて行く訳で、個人の自

由を束縛そくばくし個人の活動を切りつめても、国家のために尽すようになるのは天然自然と云つていいくらいなものです。だからこの二つの主義はいつでも矛盾して、いつでも撲殺ぼくさつし合うなどというような厄介なものでは万々ないと私は信じているのです。この点についても、もっと詳しく申し上げたいのですけれども時間が無いからこのくらいにして切り上げておきます。ただもう一つご注意までに申し上げておきたいのは、国家的道德というものは個人的道德に比べると、ずっと段の低いもののように見える事です。元来国と国とは辞令はいくらやかましくつても、徳義心はそんなにありやしません。詐欺さぎをやる、ごまかしをやる、ペテンにける、めちやくちやなものであります。だから国家を標準とする以

上、国家を一団と見る以上、よほど低級な道徳に甘んじて平気でいなければならぬのに、個人主義の基礎から考えると、それが大変高くなって来るのですから考えなければなりません。だから国家の平穩へいおんな時には、徳義心の高い個人主義にやはり重きをおく方が、私にはどうしても当然のように思われます。その辺は時間がないから今日はそれより以上申上げる訳に参りません。

私はせっかくのご招待だから今日まかり出て、できるだけ個人の生涯を送らるべきあなたがたに個人主義の必要を説きました。これはあなたがたが世の中へ出られた後、幾分かご参考になるだろうと思うからであります。はたして私のいう事が、あなた方に通じたかどうか、私には分りませんが、もし私の意味に不明のと

ころがあるとするれば、それは私の言い方が足りないか、または悪いかだろうと思います。で私の云うところに、もし曖昧あいまいの点があるなら、好い加減にきめないで、私の宅までおいで下さい。できるだけはいつでも説明するつもりでありますから。またそうした手数を尽さないでも、私の本意が充じゆうぶん分ぶんご会得かいとくになったなら、私の満足はこれに越した事はありません。あまり時間が長くなりますからこれでご免を蒙ります。

青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 夏目漱石」筑摩書房

1992（平成4）年1月20日第1刷発行

底本の親本：「夏目漱石全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年7月26日第1刷発行

入力：真先芳秋

校正：かとうかおり

1998年11月19日公開

2008年10月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

私の個人主義

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>